

日本における中東情勢報道は過度に宗教に目を向ける傾向があるが、**世俗的・地政学的な分析**が必要です。

1) 中東での紛争はイスラエルの領土拡張・植民地主義が原因

イスラエルがイランを脅威とみるのは、領土拡張・植民地主義に抵抗するパレスチナのハマスやレバノンのヒズボラをイランが支援しているから、またイランが中東一の大国であるためです。イスラム教を潰したいためではありません。世俗派のネタニヤフにとり、シオニズムは政治イデオロギーを実現させるための道具。宗教起因でなく**土地をめぐる紛争**がパレスチナ問題の本質です。

2) 指導者の個人的利害

ネタニヤフがガザ攻撃を続けているのは、彼自身の汚職疑惑からのがれるため。イラン攻撃はその延長上にあります。トランプはエプスティーン(少女売春手配をしていたアメリカの富豪)文書絡みの疑惑追及と過去の選挙介入などの裁判問題から国民の目をそらすために、イラン攻撃へのネタニヤフによるそそのかしにのってしまっただけ。個人的理由で大量殺人をされてはたまりません。

3) イスラム教にはユダヤ教やキリスト教を誹謗する教えはない。

これら3つの宗教は同根です。ムスリムは、ユダヤ教の選民思想を嫌い、キリストを神と見なすのは間違いとしています。が、歴史的にムスリムが支配した地域では、ユダヤ教徒は税金を払えば保護されました。キリスト教徒も迫害されませんでした。後ウマイヤ朝、オスマン帝国を見れば分ります。ユダヤ人を迫害したのは主にキリスト教徒の支配者です。例えば、レコンキスタ後のスペイン。イスラム教ではキリストは、預言者の1人です。ちなみに最後で最高の預言者がモハメドです。イスラム教徒の名前にはキリスト教徒の名前と同じものもあります。欧州ではユダヤ人が迫害されたが、イスラム世界でユダヤ人が迫害されたことはなく、中近東でイスラエルとムスリム国家との摩擦が生じたのは、イスラエル建国以降のことです。

4) 反イスラエルと反ユダヤとはおなじではない。

イスラエルの行い、あるいはシオニズムそのものに反対するユダヤ人は大勢います。アメリカの言語学者チョムスキーは、その点で一貫しています。アメリカでは、資金的に有力なユダヤ人への気兼ねから、欧州では過去にユダヤ人を迫害した後ろめたさから、過度にイスラエルを弁護・応援をする傾向があります。

けれども、フランスの世界的知識人エマヌエル・トッド(ユダヤ人)は、「反イスラエルを反ユダヤと同一視するのは新たな反ユダヤ主義だ」と言っています。つまり、ユダヤ人良識派まで一括して、悪いイスラエル人と同一視するのは新しいユダヤ人蔑視だ、ということです。

5) トランプがネタニヤフにそそのかされた訳:

米国家テロ対策センター長のジョー・ケントは「イランは差し迫った脅威ではなかった」といって辞任し、「イスラエルとアメリカ国内のロビー団体が」がアメリカを引きずりこんだと批判。4月7日のNY Timesの報道でもトランプ政権内ではイランの体制転換に反対意見が多かったが、核・ミサイル能力の無力化などを目的とした攻撃に強硬な反対意見はなかった。攻撃に疑問を呈していたバンス副大統領もトランプ氏が決断するなら支持する

と表明したということです。次期大統領選出馬を狙うバンスとしては、国民に評判の悪いイラン攻撃の責任を負いたくないでしょう。トランプの娘婿クシュナーがネタニヤフと親しいことが一因です。またイスラエルのモサドがエプスティーン(ユダヤ人)文書の詳細を掴んでおり、これでトランプを脅迫してそそのかしたという説も有力です。またラスベガス、シンガポールでカジノ経営に成功しているアデルソン(ロシア系ユダヤ人)はネタニヤフとトランプの両方に資金援助し、今回の「そそのかし」にも関わっているようです。

6) 武器商売の為に敵をつくり、武器能力の実験としてイラン攻撃をする

アメリカからの武器大量購入のお得意様であるサウジアラビアがイランと仲が悪いのはアメリカにとって好都合です。裏で中国とディールをしながら、米中対立を表面上見せつけて日本に使い物にならない武器を高額で買わせるアメリカのやり方です。また武器を各国に輸出するために能力実験の場にイランを使っているのは、アメリカのみならず武器輸出大国イスラエルも同じです。

7) イランの反体制運動

デモ弾圧のようなイラン指導層の強権行使に私は賛成しません。しかしデモは経済的な窮乏に端を発しており、それはアメリカが各国を巻き込んだ経済制裁が主因です。私は 2002～2011 にかけてイランへ何度か出張しましたが、当時でも経済制裁で商売がやりにくくて苦労しました。その頃印象深かったのは、イラン市民は教育水準がたかく、反米感情はそれほどなかったことです。「サウジでは上層部が親米、庶民は反米、イランでは上層部が反米、庶民が親米」という冗談がありました。今回の攻撃で、トランプは反体制派を応援するつもりだったようですが、逆に反米感情による団結心がイランに生まれたのではないのでしょうか。

8) アメリカ・イラン関係の歴史

アメリカのイラン嫌いは、1979 年～80 年のアメリカ大使館員人質事件から始まるが、もとはといえば、1951 年に民主的に選ばれたモサデグ首相を 1953 年に米英が CIA の工作で倒しパハレビーを擁立したクーデタが発端です。「イラン憎し」のアメリカ(大統領はレーガン)でイラン・イラク戦争の際、サダム・フセインの支援までしました。1986 年にはレバノンでヒズボラの人質になったアメリカ市民をイラン(ラフサンジャニ大統領)が救出したのに、救出要請をしたブッシュ(父)大統領は見返りをイランに送らなかった。クリントン大統領当時、イランは関係改善のため、アメリカのコンコに油田開発権を渡す契約を締結しようとしたが、クリントンは突如白紙にしてしまった。2001 年の同時多発テロ以降、アフガニスタンのタリバンの情報をイランはアメリカに与え続けたが、アメリカからの見返りはお礼でなく、ブッシュ(息子)による「悪の枢軸」よばわりでした。オバマ政権とロウハニ政権による核合意が、トランプによってご破算になってしまったのはご存じでしょう。このように、イランがアメリカに何度も裏切られてきたのが事実です。

9) この戦争に宗教色はないのか

前述のように殆どありません。皆無とはいえない点は、しかし、あります。一つには、ネタニヤフは世俗派の人ですが、連立与党である**極右の宗教シオニスト党**党首モトリッチがネタニヤフと協力して今回の攻撃を仕掛けているからです。もう一つは、アメリカでのトランプの有力な支持層である**キリスト教福音派**が、今回の戦争を終末に向かう世界における「善と悪の戦い」の一部としており、トランプを煽っているからです。

10) スンニー派について

サウジアラビア(スンニー派)とイラン(シーア派)の対立は、覇権に関わることであり、一部報道にあるような宗派の争いによるものではありません。スンニー派とシーア派の違いは、昔の後継者に関するもので教義の違いは殆どありません。私がバーレンの最大モスクを見学した時に、案内してくれたバーレン人は「自分の両親はスンニーとシーアだ」と言っていました。サウジに住んでいるシーア派の人は就職後の昇進などでスンニーより不利になることはあります。バーレンはシーア派が多数ですが、王家がスンニーです。2011年のアラブの春のときのシーアによるデモは、サウジから戦車がくるなどしてスンニーにより制圧されました。イラン人は、サウジ人を石油成金とバカにしたようなところがあり、サウジ人にとりイラン人は誇り高くアラブ人を見下したようなところが気に入らない、ということもあるようです。私のサウジのお客様(石油化学会社)には昔のイスラム世界の科学者の名前を通称にした会社が多々ありました。その中でイブン・シーナ、アッ・ラジーはどれもペルシャの医者・哲学者の名前です。アラブ人もペルシャの偉人をイスラム世界の偉人として称えています。イランはペルシャ語を話しますが、字はアラビア文字です。今回の戦争で、イランは米軍基地を持つアラブ諸国への攻撃をしています。スンニーの多いアラブ諸国は我慢しています。これ以上施設を破壊されたくないこと、アメリカに協力参戦したら、領内のシーア派のみならず、多くの民衆の反イスラエル感情を更に刺激し、反発が自国内で広がるのを畏れるからです。

11) パレスチナはユダヤ人祖先の土地か

ユダヤ人はローマの神を拝むことを拒否し、紀元 135 年の第二次ユダヤ戦争に負けローマ帝国からパレスチナを追われて離散集団(ディアスポラ)化したのですが、そのユダヤ人はアシュケナジム(中欧・東欧系)、セファルディム(南欧系)、ミズラヒム(中東・アフリカ系)に分類されます。イスラエルで実権を握っているのはアシュケナジム(アシュケナージ)です。イスラエルでは 3 階にアシュケナージ、2 階にセファルディ、1 階にアラブ人その他が住んでいる、と言われます。2023 年 4 月、パレスチナ自治政府のアッバース大統領が、「ヨーロッパのユダヤ人は古代イスラエル人の子孫ではなく、トルコ系ハザール人であり、イスラエルの地とは無縁だ」などと述べました。ここで言うヨーロッパのユダヤ人はアシュケナージのことですが、コーカサス・カスピ海方面に 7 世紀に存在したハザール王国の言語はチュルク(トルコ)系でアシュケナージのイディッシュ語と遠いという点で、この説には難があるとのこと。一方、近年、遺伝学者のチームは、アシュケナージの半分以上に出現する遺伝子の特徴が、中央アジアに発するもので、セム族など中東起源のものでないことを発表したといっています。アシュケナージの起源としては、他に、ローマ時代イスラム世界から商人としてヨーロッパを訪れたとする説、イタリアからアルプスを越えてやって来たとする説もあります。いずれにせよ、現在のパレスチナ人の祖先が現在のユダヤ人の祖先を追い出した訳ではなく、シオニズムは迷惑な話で、それを支援してきた欧米の罪は深いと思います。

最後に

「日本はどのように対応すべきか」は、ここでは論じないで、気が向いたら改めて書きます。

以上